

てとり

特集

～コロナ2年目～
それでも 前へすすむ



vol. **15**
2021.11



団体の皆さんに聞きました。 「コロナの影響はどうでしたか？」

2020年1月16日に日本で最初に新型コロナウイルスの感染が確認されてから、今号発行時点で間もなく2年が経とうとしています。「三密」「コロナ禍」「ソーシャルディスタンス」「黙食」など、新型コロナウイルスに起因する様々な表現が当たり前に使われるようになりました。当センターでは本年度、県内の団体等が新型コロナウイルスによる影響をどの程度受けているかをアンケート（※1）により聞いてみました。



vol.
15
2021.11

てとり

CONTENTS

02 団体の皆さんに聞きました。 「コロナの影響はどうでしたか？」

特集

～コロナ2年目～ それでも 前へすすむ

04 きりんのまち・愛プロジェクト



05 ホウキっこ・チリトリおとな

06 NPO法人大地 いちごの広場



コロナ禍、団体のその後

07 子ども文庫 Pippi&Lotta (ピピロッタ)



07 虹の会 (不登校や障がい、ひきこもりの親の会)

県内のSDGsの取り組み

08 にほんごがくしゅうかい

08 MCC

新理事長インタビュー

09 組織づくりを応援できる 支援力を高めたい

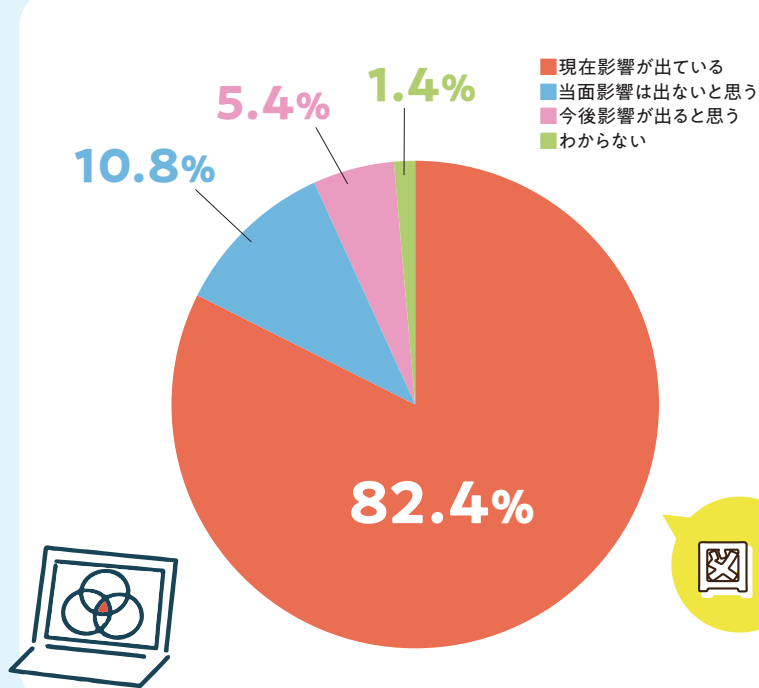


高校生ing

10 鳥取県立倉吉総合産業高等学校 「くらそうや」



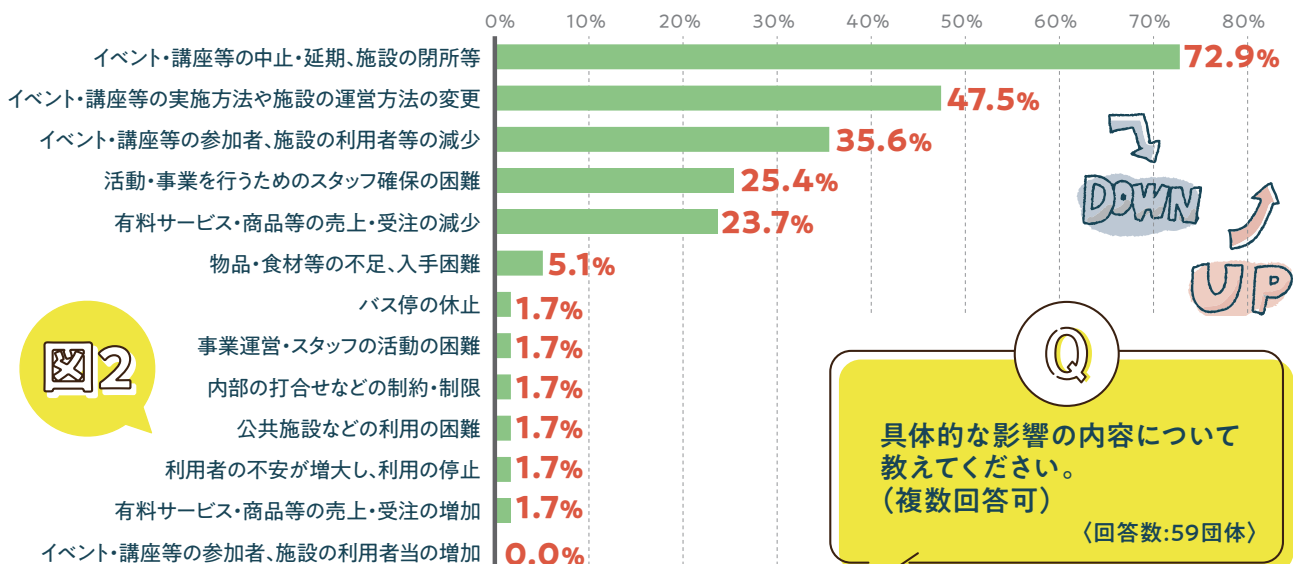
※1 令和3年度『新型コロナウイルス感染拡大の影響と対応及びSDGsへの取り組み等に関する鳥取県内のNPO等へのアンケート調査』



令和2年度の1年間における
新型コロナウイルス感染症により、
団体の活動や事業、利用者に
影響が出ていますか？

〈回答数:71団体〉

図1では令和2年度の1年間における新型コロナウイルス感染症により、団体の活動や事業、利用者に影響が出ているかどうかを聞いた。「現在影響が出ている」と回答した団体が82.4%で、ほとんどの団体が影響を受けていることが分かる。緊急事態宣言や蔓延防止重点措置が出たことを考えると驚く結果ではない。



具体的な影響の内容について
教えてください。
(複数回答可)

〈回答数:59団体〉

では、具体的にどのような影響があったのかを聞いた結果が図2である。ご覧の通りプラスの影響はほとんどなく、団体の本業やその運営にあたるスタッフの確保などに大きな影響を受けていることが分かる。

容易に予想できる結果なのかもしれないが、せっかくなので、少し具体的にイメージしてみたい。

例えば、子ども達に体験活動を提供する団体の活動ができなくなったから、自然や芸術に触れることで子ども達の感性を養っていたが、その機会がなくなり、新しい出会いや他者とのコミュニケーションが失われ、子ども達の育ち、学びに大きな影響を及ぼすだろう。住民の共助で地域の方々の買い物や通院を支える団体の活動が立ち行かなくなったら、外出のたびにタクシーを呼び、出費がかさむことで家計が苦しくなったり、外出の機会を減らさざるを得ないことで孤立を深めていくことになるかもしれない。

アンケートからは、回答いただいた団体の多くが新型コロナウイルスによる影響を受けて、活動の停滞、あるいは団体の存続に関わる危機に面していることが伺えた。一方で、コロナ禍という困難な状況の中でもできることを模索し、新しいアプローチを見出した団体もある。今号では、困難な状況にある中でも「それでも 前へすすむ」ために、動き続ける団体を取りあげた。彼らの言葉から、困難な時代を生き抜くヒントを探してみたい。

きりんのまち・愛プロジェクト

「きりんこども食堂」の運営

■活動場所 鳥取市立川町6丁目174
岩倉地区公民館
■連絡先 080-9804-8474
■活動 毎月第1・3水曜日、17:30～20:00



代表
桑田 達也さん

同じ
空気を吸って、
つながること

「今までは、学校の給食みたいーに一緒に『いただきます』をしていただきたんですけど。大家族で食べている感じが、今はいつもの家族ごとに食べている感じで少し寂しいですね。」

コロナ禍で半年間も食堂が開けず、再開したのは昨年9月。以前は、大広間に50人ほどが集まっていたが40人ほどに減り、小部屋で2人3家族ごとで食べるのが当たり前になった。子どもたちは年の差を超えて友達になり、親同士も血洗いをしながら会話する。そんなにぎやかな食事風景はすっかり変わった。

桑田さんが代表を務める「きりんこども食堂」は今年で丸7年になる。以前、鳥取市議を務めていた頃から制度の狭間で苦しむ人たちの受け皿が作れないかと思い、テレビ番組でこども食堂の特集を奥様が見かけたことをきっかけに桑田さんの「居場所作り」が始まった。

「最初は0人、2回目も0

人。3回目によく2組が来てくれて、そこからぼちぼちとこんなやっていくよと子ども同士や親子が来てくれるようになりました。」

「環境に苦しみ、悩みがある人も食事があると入りやすいんです。一緒に席を囲む間に、ぼつぼつと相談し合えるようになります。」



た。」「居心地の良さが評判を呼び、岩倉地区だけでなく、校区外からもたくさんの人たちが集まる場所となった。」

食堂という場所がコミュニケーションを育むのに適しているからこそ、今、こども食堂の必要性が高まっているという。

「コロナ禍で外に出ない、地域のつながりも不足している、イベントもない状況。外に出なかった人は余計に出にくい社会になっている。オンラインというのは出ていなくてもつながれるけど、居場所に足を運ぶことはもう少し能動的な行動。それが大事。それに、同じ空気を吸うことで人は感覚的につながることができると思います。」

桑田さんは、今、新たな取り組みも始めている。より具体的な悩みを打ち明けられる場を設けたいと、1人2家庭限定で2時間一緒に食事をする「相談型こども食堂・ムーミンのテーブル」を設けた。少しずつでもリアルな場づくりを通し、困っている人を少しでも救う居場所を作りたいと歩み続けている。





ホウキっこ・チリトリおとな

子育て世代を中心にした地域づくり活動と芸術・文化振興活動

■活動場所 鳥取県西伯郡伯耆町溝口647
溝口公民館
鳥取県西部エリア

■連絡先 080-8011-0285
houkikko@gmail.com

■活動 年4~5回(不定期開催)



■会 長
山本 宏美さん

気持ちの交換が
できる地域で
ありたい

「手を洗いましゅうっ
しゅっ。」

パソコンの画面からほが
らかで元気な声が聞こえて
くる。参加者は全て親子。コ
ロナの影響で子どもたちは
ステイホームで遊びの選択
肢が狭められ、リアルな体
験にこだわって活動してき
たホウキっこ・チリトリお
となは活動の場を失った。
悩んだ末、実施したのがこ
のオンライン手洗い会。軽
快な音楽に合せての振り付
けにより、楽しみながら感
染予防を行うことと交流が
目的だ。

「オンラインには否定的
でした。団体としてリアル
にこだわって活動してきた
ので。」団体として大きな
イベントを企画し、開催直
前にコロナの影響によりや
むを得ず中止した。その際、
メンバーと話し合ったが、
それぞれ捉え方が違った。
コロナに対しての捉え方の
振れ幅が大きく自身の立ち
位置を保つことにもものすこ
いエネルギーを要した。

「それぞれ捉え方が違っ
たからこそ、自分の意見を
本気で伝えました。そして
相手の意見を本気で聞きま
した。溜め込んだり隠すの

のあらゆる場面で様々な影
響を及ぼした。「これまでに
増して分断や軋轢、もやも
やしたものを感じました。
そしてSNS的に言うところ



ではなく想いの交換ができ
たことが少しは組織として
の成長につながったような
気がします。」

コロナは私たちの暮らし

『炎上』を恐れて大人たちの
社会で黙っていることが得と
いう空気が気持ち悪い。
子どもは大人を見て成長し
ます。自分の気持ちや想い

をちゃんと伝えられる人間
になってもらいたいから、
私はそういう姿を子ども達
に見せていきたいんです。」
分断や軋轢、もやもやは
黙って動かなければずっと
そのまま。対話しなければ
ば解消できない。
最後にホウキっこ・チリ
トリおとなという団体名の
由来を紹介したい。「ホウ
キっこ」とは、気持ちを上手
にはきだせる子ども。そし
て伯耆町が大好きな子ど
も。「チリトリおとな」とは、
気持ちを上手に受け止める
大人。そしてホウキっこを
増やしたいと願う大人。
ホウキっこ・チリトリお
となが理想とする地域は、
住民誰もが発信したい気持
ちがあるのであればきちん
と発信できる地域だ。そん
な地域となるよう、今日も
歩みを止めない。





NPO法人大地 いちごの広場

就労継続支援B型／生活介護

■活動場所 西伯郡日吉津村日吉津2282

■連絡先 0859-27-1332

■活動 月～金曜日、8:30～17:00



■理事長

河原 道弘さん

協力し合う力で、 逆境を 乗り越える

遠くに大山を眺められる畑には、冬の収穫に向けて育っている白ネギがある。その横ではイネの苗箱を一生懸命に洗う利用者とスタッフの姿があった。キラゲの軸切り作業もあれば、カフェ販売もある。「ここでは障がいがあるからできないじゃないかと、その人がどうしたらできるかを考える。その上で、みんながそれぞれでできることで協力することが大切です。」と河原さん。これが「いちごの広場」のモットーだ。

障がいのある人たちの居場所を作るため、有志が立ち上がってきたのが約30年前。「最初は仕事をするというよりは、家から一歩出かけるための居場所でした。それがだんだんと働くことの大切さを実感し、生産活動を増やしてきました。」焼き菓子や漬物加工、野菜作りをしながら作業量を増加。5年ほど前に、現在の土地に移転して農作業に力を入れ始めた。きっかけ

でたくさんさんの工程があるんです。誰もが関われる工程がどこかにあって、みんなが自分の作ったものが商品になるのがわかる。そうす

フェが数カ月にはわたって店を開けられなくなり、その分売り上げは減少。そこでも一致団結し、前を向けたのは大きかったという。



は近隣の農家さんから白ネギの苗を分けてもらったことだった。

「ネギの作業は、種まきから苗を育てる、収穫するまで。加工販売している力

「自分たちには野菜やパンといった自力で生み出すものがあつた。きつと利用者さんたちもカフェができなくなることで寂しさや危機感があつたんでしょ

冬場も窓を開けて感染対策をしながら白ネギの作業にあつた。団体の絆も感じつつ、河原さんは地域のつながりにも改めて感謝をする機会になつたという。

「この土地とのご縁も地域の人がつないでくださったし、白ネギの苗を譲ってくださいのもそう。地域のおかげ。今回も日吉津村からエコバッグを作る仕事をいただき、助かりました。働くことで対価を得られる、私たちが大切にしている働く喜びをいただけたことが何より嬉しかったです。ここでの仕事は競争じゃなく協力。みんなが協力していくこと、これができたからこそコロナも乗り越えていけると信じているんです。」

コロナ禍、団体のその後 前号で取り上げた団体の「その後」

子ども文庫 Pippi&Lotta (ピピロッタ)



—— お互い様の図書館でありたい ——

「コロナ禍でも一度も休むことなく活動を続けることができています。」私設図書館「子ども文庫 Pippi&Lotta (ピピロッタ)」を運営する塩邦恵さん。週に一度自宅の一室を開放して児童書を貸出ししているが、コロナ禍ではドライブスルーでの貸出しで活動をつづけた。

コロナの影響が全くなかったわけではない。子どもたちを対象としていることもあり感染防止には十分に手間をかけ、様子を見ながら、悩みながら…。コロナ禍でスタートしたドライブスルーでの貸出しの時、お菓子子ども達にプレゼントすると、「すごく喜んでくれて、私もコロナ禍でのひとつの楽しみになった。」

■代表
塩 邦恵さん

■活動場所
鳥取市徳吉
■連絡先
shiokunie@gmail.com
■活動
毎月4回



虹の会 (不登校や障がい、ひきこもりの親の会)



—— 会うことで安心できる場所を守りたい ——

「活動を続ける事や理解啓発の為に動く事は人を集めることになる。やりたいう事がないというジレンマがあります。」不登校や障がい、引きこもりという状態に悩む保護者や理解者が集う虹の会。自身も子どもが不登校となった経験を持つ遠藤明子さんは「同じ悩みを持つ人達と会って話す事で、共感や理解を得られ、心が救われます。そして、色んな情報を得る事で気持ちの整理が出来、少しずつ前向きな気持ちに芽生えて来ます。」それは私自身が経験してきた事なんです。」という。コロナ禍はその根拠を揺るがす。

片隅で話し込んでいる人の姿があった。自分と似た境遇の方や、もっと詳しく話を聞きたいという人達が情報交換をしていました。オンラインでは、それが出来ませんからね。」新聞にも開催告知を載せ、それを見て参加する新規の人もいたそうだが、現在は辞めている。オンラインの活用などできることはしてきたが、苦しんでいる人を救えていないのではないかと歯痒さを感じている。

■世話人代表
遠藤 明子さん

■活動場所
琴浦町下伊勢355-5
琴浦町立東伯文化センター
■連絡先
nijinokai716@gmail.com
■活動
毎月第2水曜日 19:00～

県内のSDGsの取り組み

「とっとりSDGs推進会議」から「とっとりSDGsプラットフォーム」へ 名称変更しました。

当センターは、SDGsに取り組む個人、団体等の情報交換・発信の場となる、
「とっとりSDGsプラットフォーム」の事務局として、
SDGsの推進を行っています。
今回はプラットフォームのメンバーのなかから、2団体をご紹介します。



<https://sdgsnwt.jimdofree.com/>

会員随時募集中!



とっとりSDGsプラットフォーム

TOTTORI SDGs PLATFORM

にほんごがくしゅうかいは、外国人と日本人住民が相互に働きかけ、事業や活動を通して異文化理解促進や相互生活扶助を目指すことを目的に活動を行っています。多文化存在下でも住みやすく、お互いの誤解や衝突を乗り越える環境を育成するのが最終的なゴールです。これはSDGsの17目標のうち、11番目の「住み続けられるまちづくりを」に深く関係するものです。

2020年11月には、外国人と日本人、そして日本人同士でも各々異なった考え方を持つことを実感して、言語化し、そこから相互理解を進めるためにクロスロードという対話促進ゲームを行いました。ゲームは、環境や多様性をテーマにして究極の選択を行い、その選択について理由を述べ合うというものです。



ゲームの質問とSDGs



■連絡先 ngakushukai@gmail.com



2021年11月7日タイムフェスティバルにて

にほんご がくしゅうかい 異文化理解促進

私たちボランティア団体MCCは、青少年健全育成を目的として、「子どもに会いを！」をテーマに活動する団体です。さまざまな出会い、学びや気づきなどをもちあわせ、子どもの可能性を広げたり引き出したりします。例えば、「子ども食堂」味の旅」では、県外の味と出会う。レクリエーション企画では、遊びを通して子ども同士、子どもとスタッフとが出会う。そんな、子どもが何かと出会う機会を創出しています。

昨年7月には、コロナ禍で特に経済的な影響を受けた地域のひとり親家庭を対象に、無料かつ健康的でお腹いっぱいになれる、オリジナル弁当の提供を企画しました。これはコロナ禍に対応した地域貢献であり、広い意味でSDGsの1〜3番の目標に結びついていてと考えます。この企画はMCCだけで成し得たものではなく、地域のとんかつ専門店「とん吉」様と協同で実現したものでした。SDGsの目標は、どれも今後の持続可能なために重要な地球をつくるために重要ですが、私たちのように複数の団体が協同することで新たにできるアクションがあるはずで、そこそ、17番の目標のキーワードである「パートナーシップ」の重要性を感じます。MCCは「子どもに会いを！」のテーマのもと、今後もさまざまな方との協同で課題解決に取り組んでいきたいと考えています。



MCC

「子どもに会いを！」を
テーマに活動中

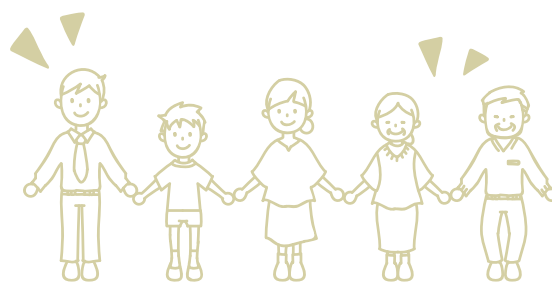
■住所 東伯郡湯梨浜町旭412-1 (とんかつ専門店「とん吉」内)

■連絡先 mcc.volunteer.2019@gmail.com



組織づくりを 応援できる 支援力を高めたい

● 理事長 毛利 葉



これまでの活動について

1980年代初めに広島
のNPO・市民活動団体の
職につき、8年前に鳥取に
Uターンし、とっとり県民
活動活性化センター（以下、
「センター」という。）の設立
に関わりました。

活動の原点は、被爆地広
島での平和のための活動と
アマチュアの人形劇団、そ
して10代の高校生・大学生、
20代の青年、30代の子育
中の女性たちが集い、子ど
もたちの文化芸術体験、子
ども主体の遊びや自然体験
等を行う「おやこ劇場」の活
動でした。

「劇場」という言葉は、建
物ではなく、「子ども」を
真ん中において様々な人々
が集い、交わり、新しいコ
ミュニティを創造・再生す
る「広場」という意味で
使っていました。この活動
の中で、私自身、子どもや仲
間たちに助けられ、活かさ
れ、支えられ、その裏方とし
て働き始めました。

1990年代後半、高齢
者・障がい者福祉、国際交
流、環境保全、まちづくり
等、様々な市民活動の方々

とNPO法制定運動の中で
出会い、その後NPO等全
体を支えていく仕事に重点
を移していきました。

目指す社会、 センターの役割

一般に「組織」は、共通
の目標を達成するための集
まりで、成果を求めて事業
を行います。NPO等ボ
ランティアな組織の本質的
な魅力は、「目に見えない大
切なこと」をたくさん学べ
ることです。身近なところ
で社会や地域の課題に触
れ、活動先や組織内で多様
な立場の人々と出会い、言
葉を交わし、他者の声に耳
を傾けることで、自分が誰
かの役に立てることや自分
たちにとって何が大切なこ
となのかに気づくことがで
きます。

センターは、ボランティア・地域づくり・NPO活動
への県民参加を広げ、その
担い手であるNPO等の基
盤強化（資金・人材・参加・情
報・ガバナンス等）の支援を
すすめています。が、なによ
り参加している人たちの満
足感が高く、利他的な営み
が自己の成長につながる文
化をもつ組織がたくさん広

がるといいなと思っていま
すし、そんな組織づくりを
応援できる支援力を高めたい
と思います。

常務理事・ 事務局長から 理事長として

設立から7年半、ボラン
ティア・地域づくり・NPO
活動の相談・研修等の支援
やヒト・モノ・カネ・情報の
資源の仲介を行い、市町村
や企業との連携、SDGs
推進事業にも取り組んでき
ました。

今後は、センターがつ
くってきたプラットフォーム
をベースに自らの現場も
つくりながら、新たな出会
いやつながりを広げていき
たいと思います。



高校生ing

鳥取県立倉吉総合産業高等学校



高校生が企画から販売まで手掛けるチャレンジ
ショップ「くらそうや」。倉吉総合産業高等学校ビジネス
科の課題研究の授業の一環として、地元の事業者や
就労支援事業所等と連携して活動している。取り組み
は今年で16年目を迎える。



「くらそうや」社長
ビジネス科3年

あき つ さ ら
明津 桜空さん



「くらそうや」の活動は、 どんなところが 楽しいですか？



自分で決めながらお店づくりができるところです。商品を試食して、自分で気に入ったものを選んで、商品の良さをどう伝えるかを考えて売る、そのひとつひとつが合わさって形になっていくのが楽しいです。また、ガイドさんとくら用心周辺を歩いて、実際の赤瓦のまちの雰囲気を見て、地元の良さや意外と知らなかったことも色々あって勉強になりました。今は準備を進めていて開店はこれからですが、お客さんとたくさんコミュニケーションをとりたいと思っています。今年はSNSも活用して、歴代「くらそうや」の中で一番の売り上げを目指します！

(取材日：2021年9月10日)

「くらそうや」に 参加した きっかけは？



「くらそうや」は中学生のころから知っていました。母に連れられて初めて「くらそうや」に行ったとき、お店の様子や先輩方の姿を見て「いいな、自分もやってみたい」と思い、課題研究の授業で「くらそうや」を選びました。これまで目立ったことをしたことがなかったので、チャレンジしてみようという思いもあり、社長に立候補しました。みんなをまとめたり、話をリードしたり、これまであまりしたことがなかったので大変なことはありますが、「くらそうや」のみんなは自分でできることを自分から言って動いてくれるので、それぞれ協力しながら役割分担ができて、とてもいいチームワークができています。

「くらそうや」って 何ですか？



生徒たち自身が企画・運営しているチャレンジショップです。倉吉防災センター「くら用心」内で毎年10月～11月の間開店しています。商品については、地元の事業者さんや就労支援事業所から提案された商品をみんなで試食し、いいなと思ったものを仕入れています。また、私たちから事業者さんに提案して新しい商品を開発することもあります。その中には「くらそうや」限定の商品もあり、ラベルも毎年自分たちでデザインしています。限定商品については、くらそうやが終わった後もお客さんから「この商品、どこで買えるの？」と問い合わせがあるほど人気があります。

これまで販売の際はお客さんに試食していただいて商品の良さを伝えていましたが、新型コロナウイルスの影響でそれもできないため、今はみんなで商品の魅力が伝わるようなキャッチコピーやポップづくりをしています。今年は店だけでなくまちなかをめぐってもらう仕掛けとして、七福神スタンプラリーも企画中です。



後編
記集

7月からセンターの一員となり、新しい出会いを期待した。コロナ禍の中、出会いはオンラインとなり、対面での出会いでなければ得られないものに気付いた。時や場所、目的により出会い方を工夫しながら、これからの新たなつながりを作っていきたい。(小林綾子)

てとり「てとり」はとっとり県民活動活性化センターの愛称です。

発行：公益財団法人 とっとり県民活動活性化センター

発行人：毛利 葉

編集人：小林 綾子

取材・編集：藤田 和俊（合同会社僕ら）、寺坂 純子、椿 善裕、谷 祐基、上山 梓、池淵 菜美、
世瀬 あけみ、尾崎 可愛、入江 一彦

写真：藤田 和俊（合同会社僕ら）

写真提供：ハウキっこ・チリトリおとな、にほんごがくしゅうかい、MCC

協力：にほんごがくしゅうかい、MCC

デザイン：山本印刷株式会社



読者アンケートにご協力ください。



「いまこれ」
バックナンバー
はこちらから。

2021年11月29日発行(第15号)

お問合せ／公益財団法人 とっとり県民活動活性化センター URL <http://tottori-katsu.net/>
〒682-0023 鳥取県倉吉市山根557-1 パープルタウン2階
TEL 0858-24-6460 FAX 0858-24-6470 E-mail info@tottori-katsu.net